送別のことば

橋本 圭司

追手門学院大学経済学部教授 佐藤伸行先生は、2026年３月31日をもってご定年を迎えられ、2015年以来のご勤務を終えられることとなりました。予期していたこととはいえ、今その時を迎えるにあたり、惜別の情を禁じえず、ここに、私自身の佐藤先生との経済学部の同僚として過ごした思い出の一端を、多大のご厚情への感謝の気持ちとともに披露させていただきたいと思います。

佐藤先生の本学勤務の前のご経歴は、早稲田大学政経学部をご卒業後に時事通信社に奉職され、社会の公器としての新聞社での第一線の記者としてドイツ、アメリカをはじめとする世界各国に駐在し、特派員、支局長としてご活躍されまして、本学へはそのようなご経験をもとに、大学という場での研究、教育に新風を吹込んでいただくべくご就任されました。

講義での主担当科目は、「国際政治学概論」で、現実問題の重要性とは裏腹に学問的見地から問題点を的確に把握しかつ分かりやすく講義ができる人材が手薄な領域であり、有力、貴重なメンバーとなっていただいたことはもとより、上級学年向けの専門演習の他、初年次教育をはじめとする学生指導にも重鎮的役割を果たしてくださいました。何よりも佐藤先生は、気さくなお人柄で学生諸君はもちろんのこと、同僚教員、事務職員の皆様と打ち解けて親身に話し相手になっていただくことが常でありまして、誰もが掛け値なしに認める人気の先生でした。佐藤先生は自らの信念を「現代社会において求められる能力は、つまるところ他者への共感である。その完成を身に着けるためには、書を通じた学修を含め、様々な経験を積まねばならない。」と述べておられます。まさしく、われわれは、「教養人」たるべきであるというのが先生の教育方針であります。特筆すべきは、「OE50」と称する選抜クラスの創設から今日まで運営の細部にわたってリーダーとして中心的指導を担っていただきました。先生のご尽力のおかげでOE50は、学生と地域社会でのさまざまな営みの現場に同行するフィールドワークの実施とともに、本

学経済学部の教育実践の重要なエヴィデンスを提供してくれております。その下部構造として、個々の学生の文章表現力の上達のための添削指導という地道な実践があるということも先生のきわめて重要な貢献であります。

佐藤先生の海外駐在時代のエピソードについては、世界の政治、経済が目まぐるしく展開している時期と重なったこともあり、とりわけ私のような立場からはお聞きすればするだけ、あるいはそれ以上の、興味深い逸話を披露してくださったものです。先生が社会の公器としての新聞記者として、時代のフロンティアに立ち、通り一遍でないご経験をされていたことがお話の端々から伺われて、一献傾けながらの会話は私の楽しみでありました。先生は博覧強記ともいうべき読書人であられまして、私個人の先生との会話の機会（といってもほぼ居酒屋でありましたが）には、私の浅薄な受け売り趣味の、文学あるいは文芸評論に関する話題から現今の政治情勢に至るまで、多くのことを学ばせていただきました、私の浅薄な読書体験から、百目鬼恭三郎の一連の書物を無理やり読んでもらって感想をお聞きするということもありました。

大きく人生行路を転換させて、関西の私立大学に職を持つという、おそらくは先生の人生の上で大きな決断を経ておいでいただいたのですが、先生が繰返し話された話題の一つが、勤務されて間もないころのいくつかの出来事です。それらの一つ一つを詳細には申し上げられませんが、大学教員としての教室、研究室の内外での学生との対応はもとより、同僚教員との意思疎通の他、ご自身の取組む研究、教育とはまた別次元で求められる対応にはやや戸惑われたご様子でありました。それはこれまでのご勤務と大きく異なる、大学という職場の風土とでもいうようなものへの戸惑いであったかと思われます。その当時の戸惑いへの先生の対処は、私のような大学の外での職場体験を持たない者にとっては一つの警鐘とも思われます。先生の戸惑いを私なりに立ち入って考えてみると、それは、仮に高等教育機関としての大学が健全に機能しているという前提をおいたとして、おそらく社会科学における経済学をはじめとする「学問」と一般社会での「常識」との違いは何か、という問題に行き当たるのではないかと思われます。

いわゆる世間知としての「常識」と大学での「学問」の関係は、その違い

を教員、学生とも第一義として認識しておくべきであり、まさにあるべき姿としての大学はそのためにこそ存在し、自覚しているかは覚束ないとしても学生はそれを知るために大学に入学してくるのだといえるでしょう。「常識」として社会に定着しているものは、その分析が往々にして不徹底であり、主観的、観念的であることが少なくありません。日常生活は、世俗への埋没であり、妥協の連続であります。漱石ならずとも「とかくにこの世は住みにくい」ですから、そこで常識といわれるものは、日常生活に役立つ、相応の分析の産物であると同時に、一定の社会的拘束力を持つものです。常識あるいは世俗の「良識」は、それが日常生活上大衆から認められ確立されたものではありますが、往々にして惰性的であり社会の根強い伝統の産物でもあります。それは、ともすれば支配者階級に好都合な、権力者の強弁に利用されることにもつながります。「常識」は、良識という側面と惰性あるいは何らかの権力に束縛された呪術的側面があり、学問は、その弊害を取除こうとする営みであります。大学教員すなわち研究者は、世俗、常識から逸脱してより高い科学的見地に向かうことを本意としなければなりませんが、同時に、とくに社会科学研究者にとっては、日常的知性と学問的、科学的知性とのバランス（Ｊ.デューイは相互了解communicationとよんでいます）に留意することが絶対不可欠であることは言うまでもありません。つまり、大学教育の現場では「常識」の受け入れと「学問」のよって立つところとのバランス感覚が求められるということです。おそらくは、佐藤先生にとっては、社会の公器としての新聞社で第一線の記者としての職業意識は、「常識」と称して時の権力者が鼓舞する「正義」との闘いによって培われたものでしょう。それが、職業人として身につけた常識、ご自身の学生時代の経験を含めて、それこそ常識的に想像していた大学教員像とは大きく異なる事態に直面し、半ば失望ともいうべき戸惑いがあったことは、先生との会話から、いつも感じられることでありました。先生の10年におよぶ大学教員生活は、経済学をはじめとする分析者が常に留意する、いわゆる諸現象の捉え方としてザイン（sein ある）とゾレン（sollen あるべき）の問題を終始思索し続ける期間であったことと想像されます。

さて、大学教員を評価する際の最重要のこととして、本学での佐藤先生の

学問的実績、社会に向けての大きな仕事は、現今の世界的な政治の動きを的確にとらえた諸著作、その代表作が『世界最強の女帝 メルケルの謎』（文春新書2016年）と『ドナルド・トランプ　劇画化するアメリカと世界の悪夢』（文春新書2016年）であります。門外漢の立場からの無責任と大胆を合わせて感想を述べるならば、前者は、イギリスのサッチャー政権を皮切りに、現在のイタリアそして日本を含めた政治的リーダーを考える際の格好の解説書であります。後者は、今日の世界経済状況のある意味での混乱を考える際にトランプ大統領の影響は抜きにできるはずもなく、本書は、トランプ大統領を知る上で（それは現今の国際情勢を知ることに直結します）、これ以上ない格好の入門、解説書であり、かつ時を経て現在の政治、経済を振り返る際のゆるぎない導きの書となることは確実であります。佐藤先生の今一つの信念は「研究の成果を分かりやすく、広く伝えることが自身にとって重要な社会貢献だと考えている。そのためには、成果物を積極的に発表することを目指しており、一般の読者の目に届きやすい作品をできるだけ多く世に送り出したい。」でありますが、本学での講義への取組姿勢そのものであるとともに、これらの著作はそのような信念のきわめて具体的な実践の産物であります。

以上、つたない言葉遣いで先生との貴重な交流を振り返り、思うところを述べさせていただきました。佐藤先生が追手門学院大学に遺されたものは、さまざまな形で直接教えを乞うた学生だけでなく、教職員も長く感謝の気持ちとともに思い起こすことでしょう。この上は、執筆意欲ますます旺盛な先生におかれましては、目まぐるしく変動する政治情勢への洞察と合わせて、本学での10年間の大学教員生活を総括すべく、現今日本における高等教育論、大学論といった研究成果を公けにされますことを期待する次第です。